

# 第一章 総高訓における中退の全般的な動向について

## はじめに

総高訓における中退現象の全般的な動向を把握するために、次にあげる三つの調査を実施した。

(1) 昭和45年11月時点において、全国総高訓86校校長あてに、所定の調査用紙を送付し、45年4月1年入校生につき、4月から10月までの中退者数、および各科ごとの定員、入校数の報告を依頼した。

この調査の回答を得たのは74校であり、回収率は86%である。

(2) 昭和47年11月時点において、上記(1)と同様の項目について、所定の調査用紙を郵送し、中退数等を報告してもらった。

回答総数は54校であり、回収率は61%である。

(3) 昭和45年10月時点で、“総高訓生の素質調査”実施校14校に対して、昭和44年10月(1年生)から、45年10月の間における、中退者名、中退時期、中退事由(中退時における提出書類の<事由>欄に記述された中退事由)を各科ごとに報告してもらった。

回答校は11校であり、回収率は73%である。

## 第1節 総高訓における中退者数および中退率

総高訓に入校して途中でやめていく訓練生はどのくらいいるのであろうか。

本調査からは第3図のごとき結果がでている。

つまり、昭和45年全国調査では、訓練初期(1年生4月から10月まで)に調査対象入校生、8,921名のうち、670名が中退しており、その中退率は7.5%である。

また、昭和47年全国調査でも同じく訓練初期に調査対象総数、6,326名のうち、451名が中退しており、その中退率は7.1%である。

さらに、訓練中期、後期(1年生11月から2年生3月)には、訓練対象者1,460名のうち143名が中退し、その中退率は9.8%である。

2年間を通して調査実施できなかったが、以上の結果を組合せてみると、2ヶ年の総高訓高等訓練課程における中退率は約16%であることがわかる。

第3図 総高訓の中退率 (2ヶ年間 約15~17%と推定)

(a) 訓練初期(1年金4月~10月)

調査名	中退率	調査者数	校数
C 45年全国	7.5%	670/8,921	74
F 47年全国	7.1%	451/6,326	54
B 45年抽出	8.5%	99/1,091	10

(b) 訓練中期, 後期(1年生11月~2年生3月)

調査名	中退率	調査者数	校数
A 44年抽出	9.8%	143/1,460	11
D 45年抽出	8.5%	26/306	3

第2節 中卒訓練生と高卒訓練生との中退卒の比較

中卒訓練生と高卒訓練生と比較してどちらが中退卒が高いかを検討したのが第4表, および第5表である。

1年生4月から10月までの訓練初期には中卒訓練生が8.7%の中退率であるのに対して高卒訓練生は10.9%を若干中退率が高い。

つぎに, 1年生10月から2年生10月までの訓練中, 後期には, 中卒訓練生の中退率が10.6%であるのに対して, 高卒訓練生は5.9%と前期とその傾向を逆にしている。

そして, 年度の違いはあるがあえて, 2年内の訓練期間を合成してみれば, 極くわずかではあるが, 中卒訓練生が高卒訓練生より中退率が高いといえる。

第4表 昭和44年度1年生 10月~2年生10月中退率

中高区分	項目	入校者数	中退者数	中退率(%)
a.	中卒訓練生	1222	129	10.56
b.	高卒訓練生	238	14	5.88
	a + b	1460	143	9.79

※11総高訓

第5表 昭和45年度1年生 4月~10月中退率

中高区分	項目	入校者数	中退者数	中退率(%)
a.	中卒訓練生	889	71	8.68
b.	高卒訓練生	202	22	10.89
	a + b	1091	93	8.52

※10総高訓

### 第 3 節 訓練校別の中退率の比較

訓練校ごとで中退率はどのくらい異なるか訓練初期について、全国総高訓を比較検討したのが第 6 表であり、さらに図示したのが第 7 図である。

このように訓練校によってかなりの差違が認められる。

つまり、昭和 45 年調査で中退率が最も高いのは「日高」の 30.1%、最も低いのは「伊万里」「荒尾」の 0% である。

47 年調査の中退率の最も高いのは「川内」の 24.1% であり、逆に最も低いのは「山形」「高知」の 0% となっている。

また、昭和 45 年度において中退率が 10% 以上の総高訓は、「青森」「秋田天王」「茨城」「京都」「大阪」「日高」「八幡」「安芸」「旭川」「石川」「山梨」「愛知」「舞鶴」「和歌山」「山口」「徳島」「小倉」「佐賀」「成田」となっている。

47 年調査においては、「玉島」「川内」「千葉」「埼玉」「富山」「岐阜」「愛知」「三重」「京都」「鳥取」「岡山」「小野田」「徳島」「八幡」「成田」「安芸」である。

そして、两年度ともに、10% 以上の中退者のいる総高訓は、「八幡」「安芸」「成田」「愛知」「京都」「徳島」の 6 校である。

逆に、45 年、47 年ともに、中途率が 4% 以下の総高訓は次のごとくである。

「岩見沢」「山形」「新庄」「能登」「長野」「米子」「熊本」「延岡」の 8 校である。

このように、訓練校によって中退率はかなり差異が認められる。

しかし、訓練校による中退率の差異がなかに起因しているかは今のところわからない。例えば、都市周辺に多いとか、定員に対する入校者数の比率（定員充足率）と中退率との関連は検討したが、一般的な傾向はつかめなかった。

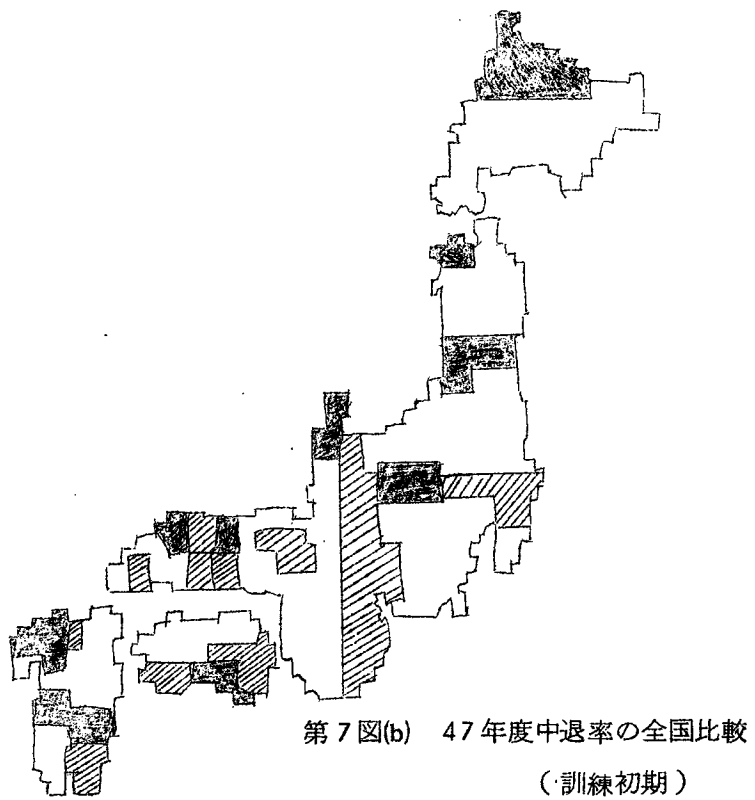
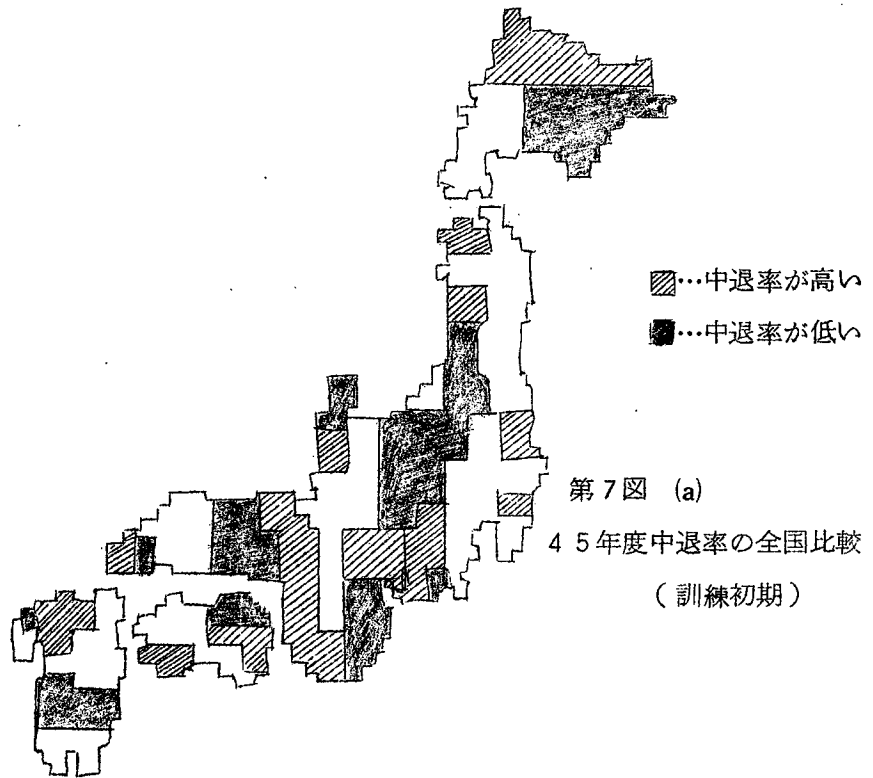
（付表 1 を参照）

第6表

訓練校別中退率と中退者実数

(訓練初期)

項目 訓練名	中退率		中退実数		項目 訓練名	中退率		中退実数	
	45年	47年	45	47		45年	47年	45	47
北海道	5.3		9		日高	30.1	8.7	34	7
函館		6.9		19	鳥取	5.8	10.5	7	12
旭川	10.5	1.6	9	3	米子	2.8	1.9	2	1
釧路	1.6	6.1	1	6	島根	4.9	2.3	10	4
岩見沢	3.4	4.0	5	7	江津	2.4	6.3	2	5
青森	22.4	2.7	13	2	岡山	3.7	10.8	4	11
岩手	5.1	5.4	6	6	玉島	5.6	21.5	5	25
宮城	9.2		19		広島	8.6		10	
築館		0.7		1	福山	6.6	6.1	5	4
秋田	6.6	6.1	9	7	山口	12.0		11	
秋田天王	27.0		31		小野田	3.4	13.0	1	3
山形	1.0	0	1	0	徳島	11.3	10.2	23	19
新庄	3.2	0.7	4	1	香川	1.9	4.9	2	4
福島					愛媛	5.9	5.0	4	5
茨城	15.1	5.9	20	11	高知	8.1	0	7	0
栃木	4.0	7.5	6	12	小倉	11.4		16	
小山	7.3		9		八幡	17.0	13.9	25	14
小群馬	2.9		4		飯塚				
埼玉	6.1	10.7	7	13	佐賀	15.4	2.4	10	2
千葉		16.0		29	伊万里	0	0	0	0
君津	7.6		8		長崎	8.8		14	
訓大	8.3	4.8	17	7	熊本	3.1	2.2	4	3
神奈川	8.7		11		熊荒	0		0	
新潟		5.6		10	大分	6.5	4.1	10	5
新潟田	1.9	6.9	3	12	宮崎	5.8		5	
富山	7.8	10.0	10	9	延岡	0.8	1.8	1	3
魚津	7.3		3		鹿兒島	4.3	5.5	3	5
石川	10.3	9.8	12	9	五所川原	5.0		4	
能登	1.2	3.8	1	2	内郷	9.5	5.0	16	8
福井	4.8		4		会津	3.5		4	
山梨	10.2		10		成田	10.7	12.8	3	12
長野	3.2	2.5	5	3	近江八幡	4.5		3	
松本	2.7	6.8	3	9	安芸	15.5	12.7	9	10
岐阜	6.7	12.5	15	18	小浜	6.5		4	
静岡	7.4		20		釜石				
浜松	3.1	4.4	5	7	土岐				
愛知	10.9	10.6	21	10	南伊勢				
三重	2.0	14.2	3	19	丸亀				
滋賀	5.7	7.5	6	8	佐世保		2.6		3
京都	21.8	10.0	12	11	宇佐				
舞鶴	10.0		7		川内		24.1		13
大阪	16.2		43		-74-			670	
兵庫	3.6	9.0	7	22	全国平均	7.5		8921	
加古川	3.5		4		-54-		7.1		451
奈良	8.6		10						6326
和歌山	12.0		13						



#### 第4節 訓練職種別の中退率

訓練職種によって中退率にどのくらいの差異があるかを訓練初期について集計したのが第8表である。

昭和45年度について、中退率の高い順に訓練職種科を列挙すると次のごとくである。

溶接科(9.20)、板金科(8.56)、塗装科(8.28)、自動車整備科(7.55)、電気科(6.13)、機械科(5.55)、電子科(5.06)、木工科(4.29)である。

つぎに、昭和47年度では中退率の高い順に科名をあげると次のごとくである。

自動車整備科(9.63)、板金科(7.95)、溶接科(7.70)、塗装科(7.28)、機械科(6.49)、電子科(6.13)、電気科(5.82)、木工科(4.57)となっている。

このように、2年間で総合してみると、自動車整備科、板金科、溶接科は、その他の訓練職種科にくらべて中退率が高いことがわかる。

さらに、中退率の高い溶接科、板金科について、各クラスごとの中退者数分布を検討したのが第9表である。

例えば、溶接科は調査対象校に41クラスあったが、そのうち中退者が一人もないクラスは9クラス、1名中退が13クラス、2名中退が9クラス、3名中退が5クラス、4名中退が3クラス、5名以上中退が2クラスとなっている。

逆に、中退率の低い木工科では、中退者がいないクラスが全国調査対象33クラスのうち、16クラスで半数をしめ、3人以上同一クラスから中退がでているクラスは全くなかった。

このように訓練職種科によって中退率が異なるという事実が判明した。(付表2, 3参照)

それでは、なぜ訓練職種によって中退率に差異があるか。定員充足率との関連を検討してみたが、第10表のごとく、あまり関連はなさそうである。

つまり、定員充足率が高いからといって中退率が高いわけでもないし、その逆の傾向もみられない。

第8表 訓練職種別の45年と47年の中退率比較 (訓練初期)

項目 年度 訓練職種	中退率(%)		中退者実数			
	45年度	47年度	45		47	
			中退者	入校者	中退者	入校者
電 子	5.06	6.13	15	296	10	163
電 気	6.13	5.81	43	701	30	516
機 械	5.55	6.49	84	1514	66	1017
自 動 車	7.55	9.63	78	1033	73	758
板 金	8.56	7.95	68	794	43	541
溶 接	9.20	7.70	68	739	48	623
木 工	4.29	4.57	24	559	17	372
塗 装	8.28	7.28	50	604	33	453

第9表 溶接科，板金科，木工科のクラス別の中退者数の分布（訓練初期）

中退者数 訓練科名	0	1	2	3	4	5以上	調査対象 クラス合計数
溶 接	9	13	9	5	3	2	(41)
板 金	14	10	6	7	0	4	(37)
木 工	16	10	7	0	0	0	(33)

(数字はクラス数)

第10表 訓練職種別の定員充足率

訓練 職 種	定員充足率 (%)		実 数			
	45年度	47年度	45		47	
			定員	入校者	定員	入校者
電 子	87.1	59.2	340	296	275	163
電 気	96.7	82.6	725	701	625	516
機 械	87.6	80.4	1750	1534	1265	1017
自 動 車	101.3	96.6	1020	1033	785	758
板 金	101.8	81.4	780	794	665	541
溶 接	93.5	101.3	790	739	615	623
木 工	91.6	83.4	610	559	446	372
塗 装	85.1	99.6	710	604	455	453

## 第5節 クラス別の中退者分布

総高訓における1クラスの設定員は15名、20名、25名、30名などであり、訓練校規模、職種により異なっているが、各クラスごとの中退者の実数の分布状態は第11表、および第12表のごとくである。

この分布図にみるように、中退訓練生が全くないクラスもあれば、中退者が5人以上もでてるところもある。

つぎに、2つの総高訓を例にとって、クラスごとの中退者がでてくる経過をおいながら、概観したのが、第13図、第14図である。

例えば、A総訓の電子科の指導員は次のよう中退事例にいきあうのである。

入校してすぐの4月に、<経済的事情>による中退訓練生、<父母の離別>による中退訓練生、<定時制との両立ができなく>中退する訓練生と面接する。

さらに、1年次12月には<大学進学のために準備をする>という中退訓練生が申し出てくる。2月には<欠席が多く訓練意欲喪失>の訓練生が中退していく。

2年次になっては、8月と10月に、一人ずつ、<就職したいのでやめる>と言ってくる訓練生に相對するという経過をたどるわけである。

第11図 クラス別中退者の分布 (訓練初期) (45年度1年生)

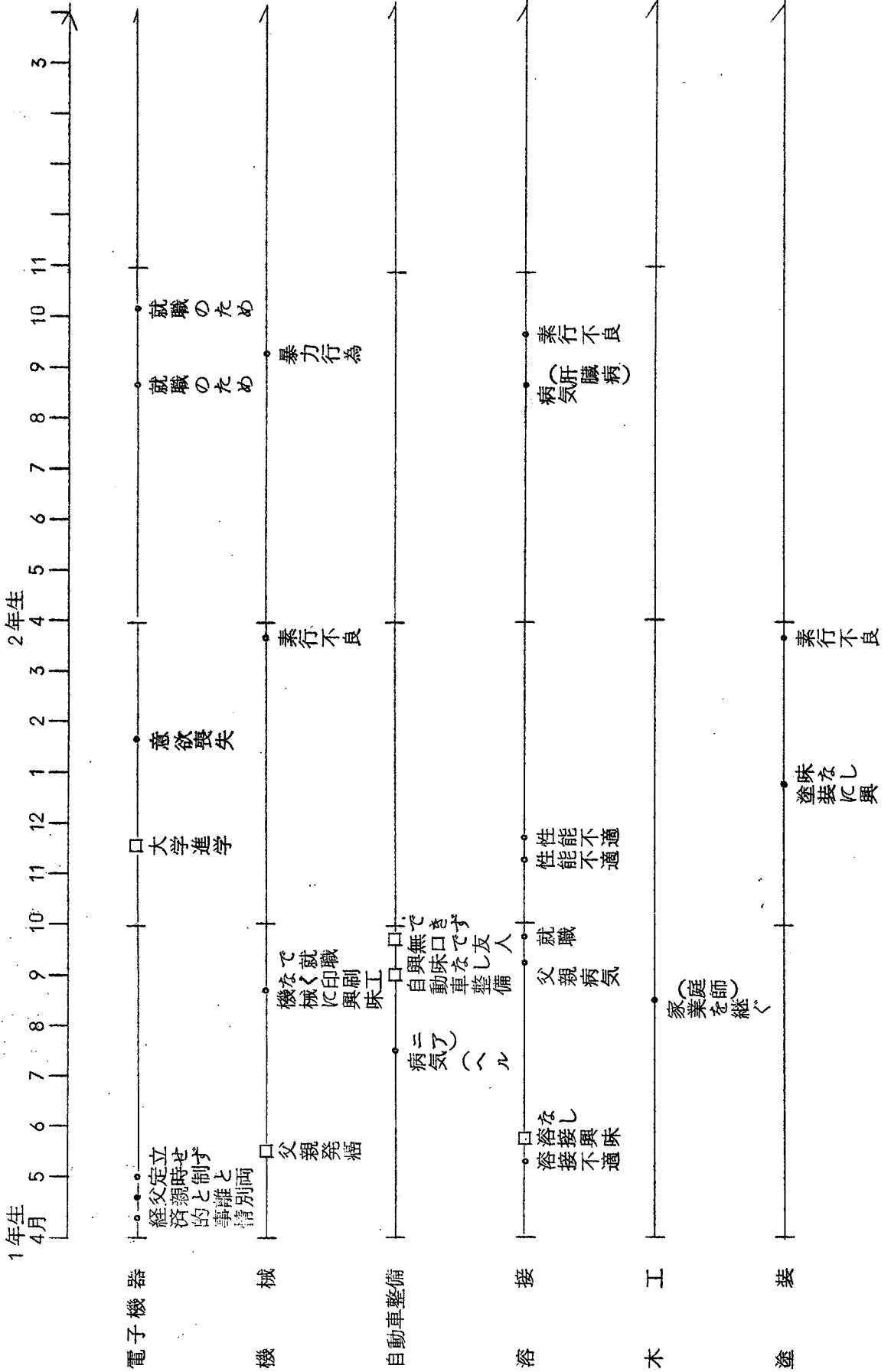
校名	科名	電子	電機	機械	仕上	精機	自動車備	板金	溶接	铸造	配管	木工	塗装	製図	第自動車	製罐	電工	ブロック
石川				1	0		0	0	2	0								
岐阜		1		0		2	5											1
岡山			1	2			1	0	1	0								
佐賀			1	2			0	1										
八幡				4	2			0	2	3						1	1	
神奈川			0	4	1	1	3	0	0		1		0		2			
訓大附		0	1	1			6	0	2	3		0	4					2
鳥取		0		0	1		0	0				0						
広島		2	1	2			0					0		2				3
京都		1		0	1	1	1											1

第12図 クラス別中退者の分布 (訓練後期) (45年1年生)

校名	職種	電子	電気	機械	仕上	精機	自動車	板金	溶接	铸造	配管	木工	塗装	製図	織調	第自動車	製罐	電工
新潟			1	0	2		0		4			1		(2)				
長野			(1) 1	1	0	(1) 1	2					1						
石川				7		2	2	2	0	0					2			
岐阜		3		2			2									2		
愛知		(1) 3		2			0		4			1	2					
岡山				2	6		0	0	6	2		0	2					
佐賀		3		4			1	0										
八幡				2	1			4	2	2								3 3
神奈川		0	(1)	(1) 2	0	0	1	(2) 2	(2) 1		(1)		0			(1)		
訓大附		0	3	0			(1) 2	0	1	0		0	1		0			1
鳥取		1		9	1		3	1				5						

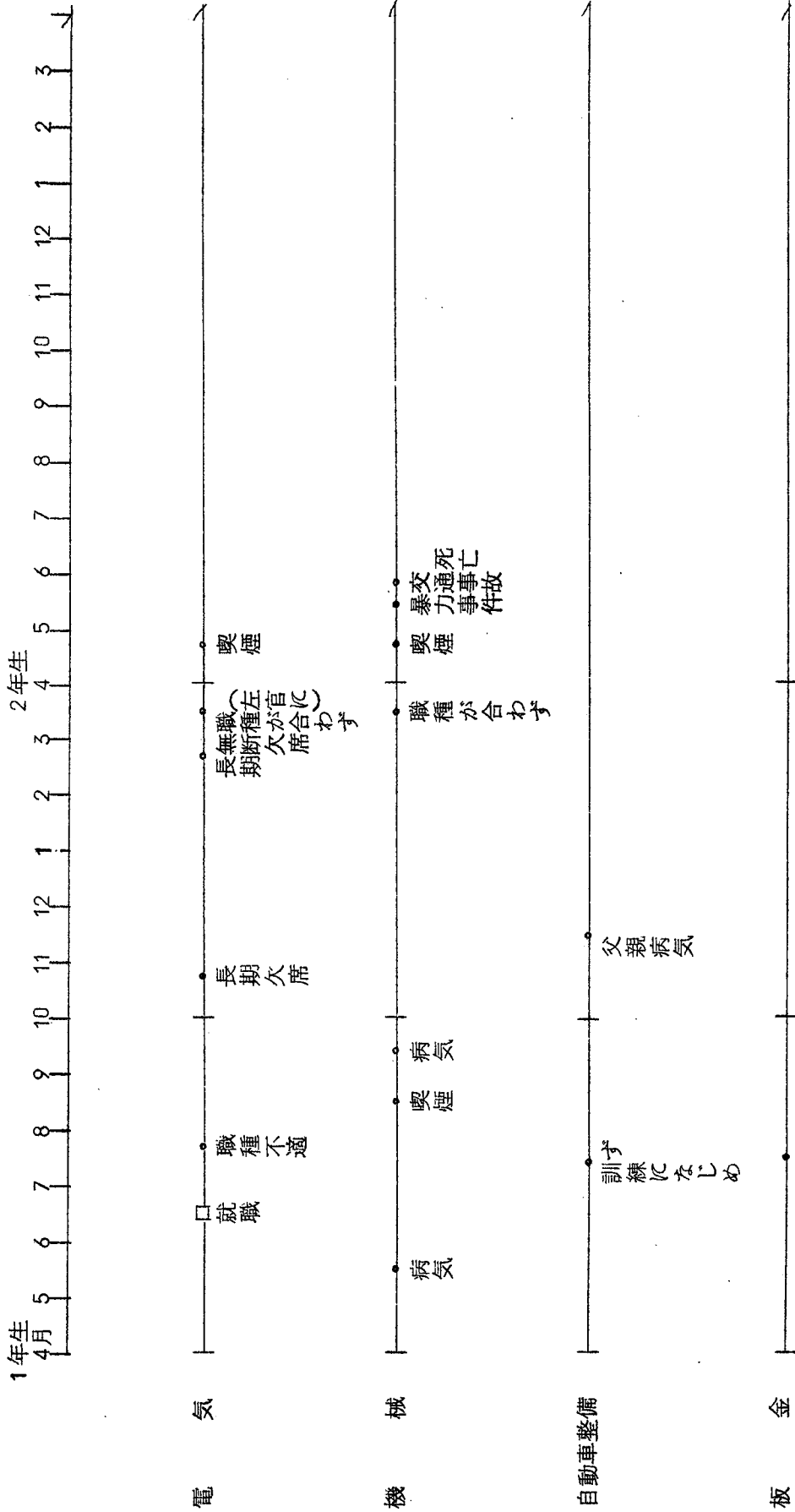


第13図 A 総高訓における中退事例 (44年4月1年生~45年2年生10月まで) (06)



第14図 S総高訓における中退事例（44年1年生4月～45年2年生10月まで）

〔08〕



## 第6節 月別の中退者数

中退者は2年間の訓練課程のいつ頃に多いのであろうか、これについて検討したのが第15図である。

各総高訓によって中退者の多い月は異なっているが、おしなべてみると月ごとの中退者の傾向は第16図のようになる。

つまり、入校直後の4月、1年次の夏休み後の9月、1年修了時の3月に、中退訓練生数が多くなっている。

おおまかに言えば、中退者の約50%が1年次の9月頃までに発生し、あとの25%が1年次の修了までに、さらに2年次になっては中退者は少なくなり、1年間で25%中退という傾向にあるといえよう。

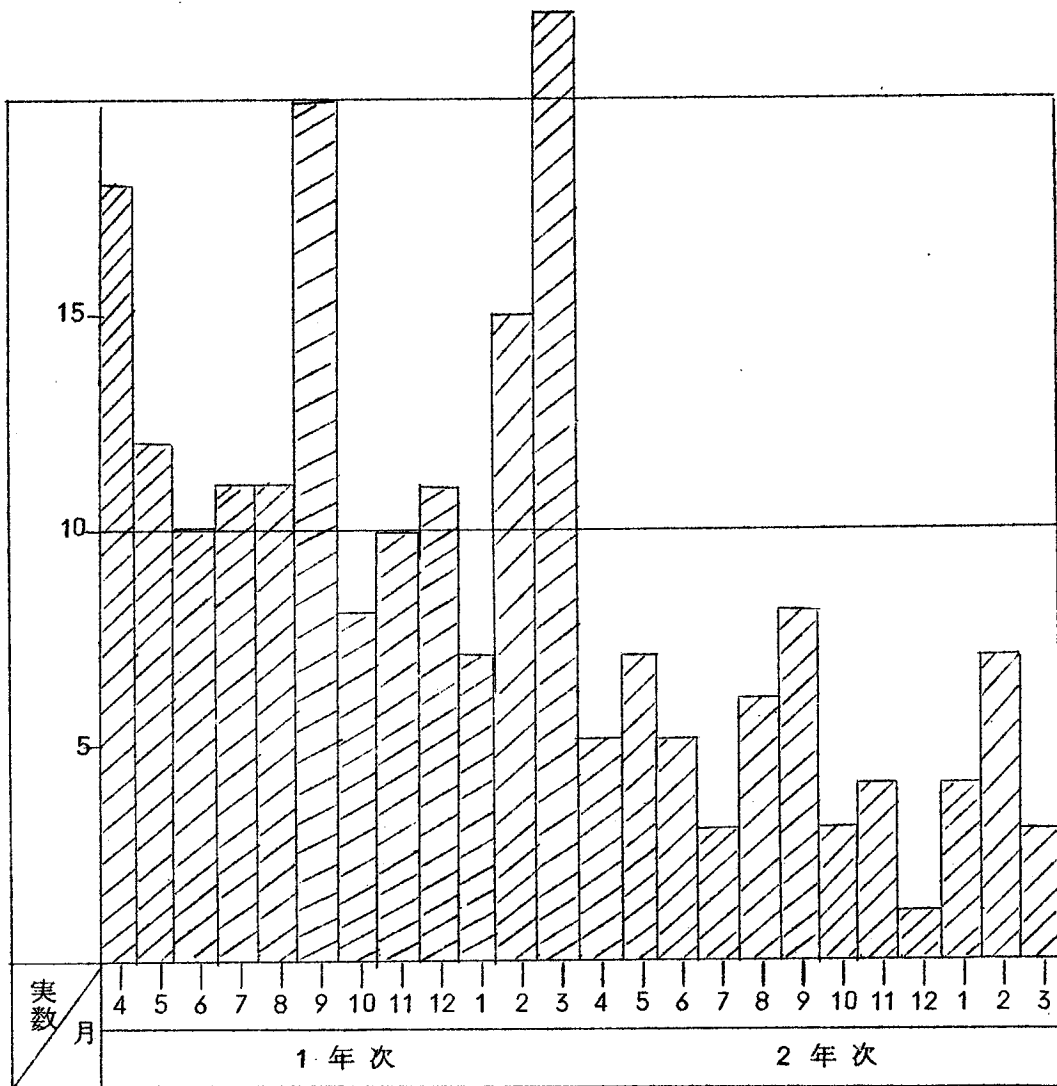
第15図 月別中退者数の分布

調査(A)~(1)

総訓名 月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
01 新潟	1	2				1	1		2	2		1		1									1	12	
02 長野	1					1	1	1		2	1	1	1					2			1		1	13	
03 富山	3	2	3				1		1		1	6	1	2		1	1	1					1	24	
04 石川	3		1	2	3	5	1	3	1	1	1	5						1					27		
08 佐賀	2	2	1	2	1			1				2	5	1	1			3	2	1	1	1	26		
09 八幡	1	3	3	1	1	5	1	2	1					1	3							1	23		
14 岩手	1	1		1	2	1			1				1			1		2	1			12			
17 広島	3		1		1	3	2	1	1	2	3	7			1								26		
18 福山	1	1	1	2		2	1	1	1		1	1		4				1	1	2		1	3	2	26
19 千葉	2	1		3	1	1	1		2	2	1	1	1			1	2					1	20		
合計	18	12	10	11	11	20	8	10	11	7	15	22	5	7	5	3	6	8	3	4	1	3	6	3	209

調査(A)~(2)

総訓名 月	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
06 愛知	4			2	3	2					2		1					11
07 岡山	2				2	2	4	1		2	1	1	1	1		1	1	19
15 鳥取					1	1			2				1					5
16 山口					2	2	2		4									10
小計	3	0	2	5	6	4	6	7	0	2	3	1	3	1	0	1	1	45
合計	13	11	9	20	31	9	13	12	3	8	11	4	7	2	3	7	4	167



第16図 月別の中退者数 (全国調査頻数累積)

### 第7節 中退時提出書類における〈事由〉欄の吟味

#### (a) 訓練初期の中退事由

(I) 訓練生個人的要因による中退は25.5%，(II)環境的要因による中退が16.1%，(III)訓練校から自主退校をすすめる中退は21.5%，そして(IV)一身上の都合、家事都合など中退理由の不明なものが36.6%となっている。(第17図参照)

#### (b) 訓練中、後期中の中退事由

中退の理由はかなりとらえにくく、特に、郵送回収法による記述では、その中退理由の表現がまちまちであり、統計的に分類するのはなかなか困難である。しかし、一応その分析を試みてみた。

第17図にみるように、(I) 適性・興味の不一致、病気・事故、通学不能、進学など訓練生個人に起因すると思われる中退は23.2%である。

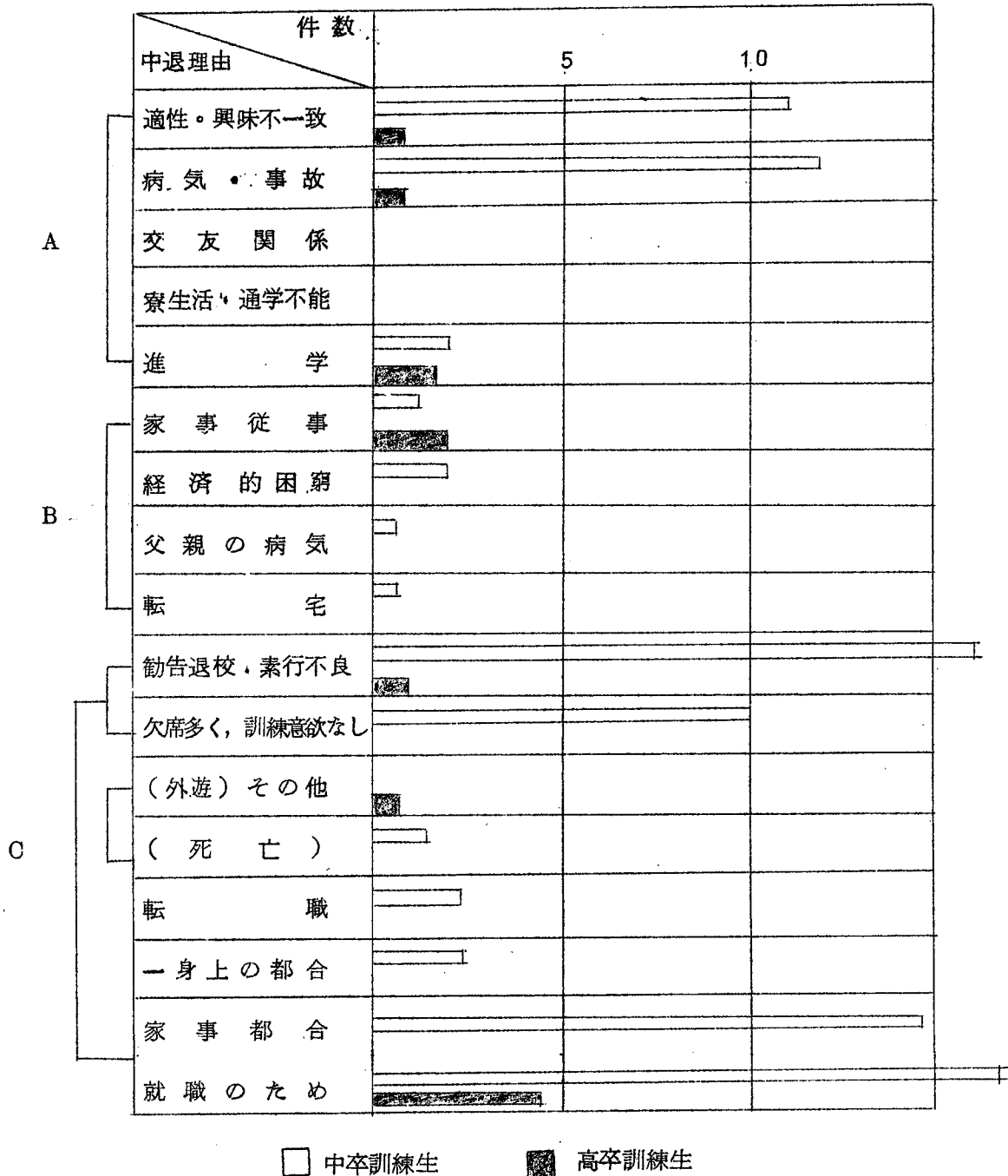
また、(II) 家業従事、経済的理由、父親の病気、転宅など環境的要因に起因する中退は6.4%となっている。

さらに、(III) 勧告退校・素行不良、欠席多く、訓練意欲なしなど訓練生側から中退をすすめる

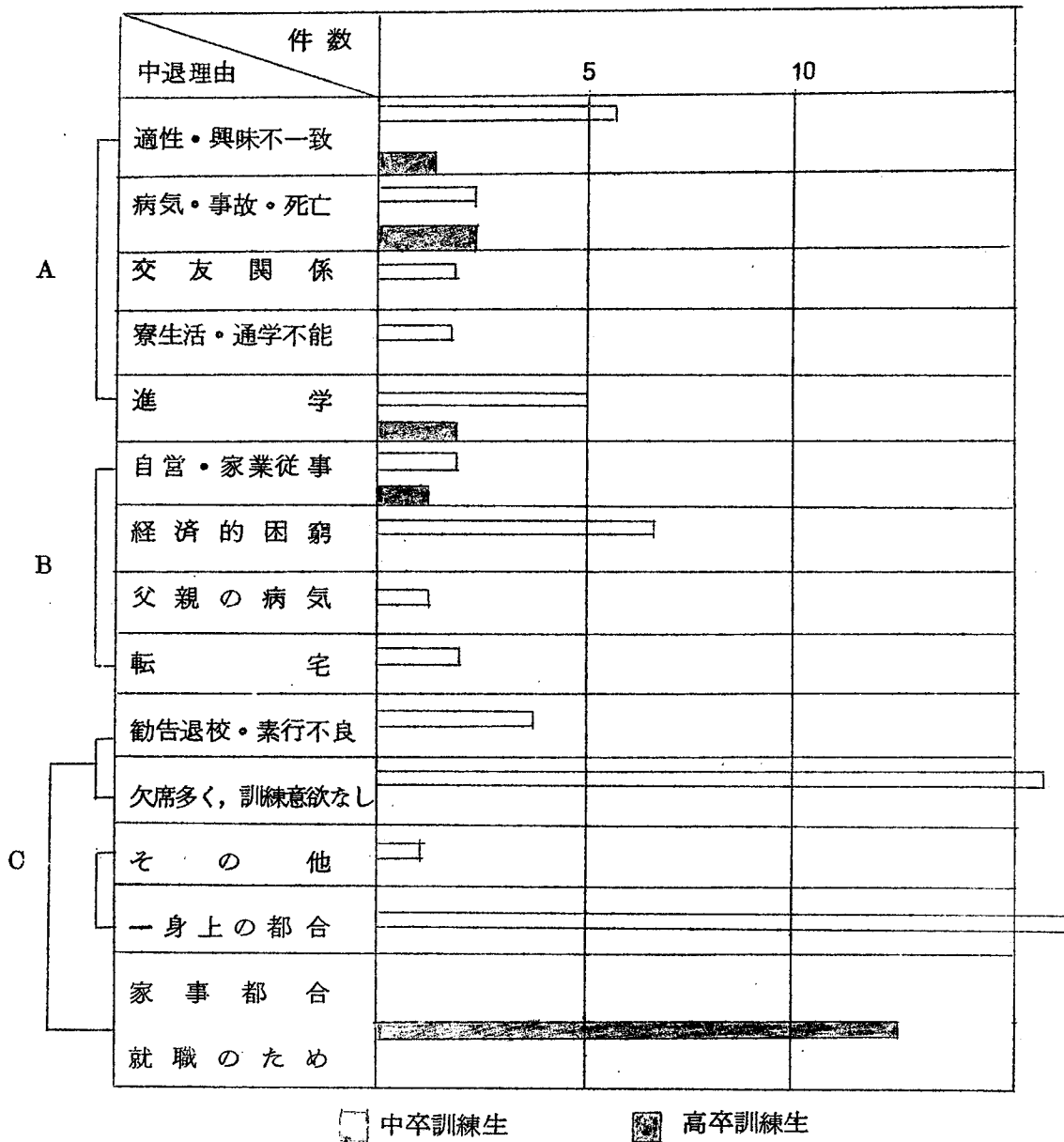
形式の中退が22.5%となっている。

そして、(Ⅳ)一身上の都合、家事都合、就職のためなど中退時の通俗的な表現により、中退の理由がわからないものが47.9%で約半数をしめている。

第17図 昭和44年度1年生 10月から2年生10月までの中退事由



第18図 昭和45年度1年生4月～10月までの中退事由



(c) 訓練期間を通じての中退事由 (A, B両調査の合計した中退理由)

訓練課程全体を通じての中退理由をつかむために、同一年度ではないが、一応、A, B調査の中退理由を総合してみた。

それが第19図である。

中退訓練の203名の事例を中退理由により、分類してみた。

(II) 環境的要因による中退は11.8%である。つまり、「家業従事」3.4%、「経済的困窮」4.9%、「父親の病気」1.5%、「転宅」2.0%である。

つぎに、(I) 訓練生個人に起因する中退は28.1%である。

つまり、「適性・興味の一不一致」9.9%、「病気・死亡・事故」10.3%、「交友関係の不適応」1.0%、「通学不能」1.0%、「進学」5.9%となっている。

さらに (Ⅲ) 訓練校からやめてもらう形式の中退は25.2%である。  
つまり、「素行不良、勧告退校」12.6%、「欠席多く、訓練意欲なし」12.6%となっている。

そして、(Ⅳ) 中退理由の不明なもの、34.9%となっている。  
つまり、「一身上の都合」「家事都合」が33.9%、「その他」1.0%となっている。

このように、訓練生の中退理由はつかまえにくく、(Ⅲ)の勧告退校、欠席多く訓練意欲なくとする訓練生の心理はつかめず、中退の真意はわからない。そのようにみると、(Ⅲ)(Ⅳ)の合せた60.1%の中退訓練生の理由が現在のところほとんど把握できないといえる。

第19図 中退理由 [203例 A, B調査]

家業従事	経済的困窮	父親病気	転宅	適不 性一 致 ・興 味	病・事 気・故 ・死 亡	交友 関係	通学 不能	進 学	勧告 退校 (素行 不良)	意欲 なし 欠 席 多 く 訓 練	一 身 上 の 都 合	家 事 都 合
3.4	4.9	1.5	1.6	9.8	10.3	1.0	1.0	5.9	12.6	12.6	33.9	
11.8				28.1				25.2		34.9		
家庭環境 (A)				個人的要因 (B)				訓練校環境 (C <sub>1</sub> )		理由不明 (C <sub>2</sub> )		

(d) 中退事由における中卒訓練生と高卒訓練生との比較

中卒訓練生と高卒訓練生とは、中退理由において、どのような差異があるかを検討する。  
訓練初期においては、高卒訓練生の勧告退校(C<sub>1</sub>)は全くない。それに対して中卒訓練生では21.5%である。(第20表)

また、家庭環境による中退でも高卒訓練生は5.3%で中卒訓練生の16.1%よりも少ない。  
高卒訓練生の中退理由は(C<sub>2</sub>)の一身上の都合、家事都合が63.2%をしめ、中退時の提示書類上からは中退理由がつかみにくいことを物語っている。

しかし、第21表にみられるように、訓練中後期になると高卒訓練生の中退理由も、一身上の都合は30.8%とその比率は前期に比べて減り、(A)個人的要因、(B)家庭環境による中退理由が増えて、中退理由がいく分つかみやすくなっている。

そして、訓練期間を通してみると、第22表のごとく、〔A〕 個人的要因では中卒訓練生が22.7%に対して、高卒訓練生34.4%となる。

〔C<sub>2</sub>〕 の訓練校側からやめてもらう形式の勧告退校は中卒訓練生では25.1%、高卒訓練生では3.1%であり、高卒訓練生ではやめさせられるという事例は極くわずかである。

〔C<sub>2</sub>〕 の中退理由のわからない者は中卒訓練生が42.4%に対して、高卒訓練生は50.0%であり、中退理由の約半数が中退の内容そのものを全く記述していないという実態である。

さらに、中退理由の記述のあるものについて中卒訓練生と高卒訓練生との詳細な内容比較をしたのが第23表である。

〔A〕 の個人的要因については、適性・興味の不一致での中退はほぼ同率であるが、進学による中退率は高卒訓練生が高い。

また、〔B〕 の家庭環境での中退は中卒訓練生9.8%、高卒訓練生12.5%でほぼ同率であるが、高卒訓練生の場合、家庭経済的な困窮による中退事例は全くなく、すべて家業に従事するとなっているのも特徴である。

このように詳細にみるとある程度の中退理由はわかる。しかし、このような中退時に提出された書類の記述のみの分析では、中退の本質をつかむ限界があることがわかった。

第22表 訓練期間全体(1年次4月~2年次10月)

中退事由 中高卒別	A	B	C <sub>1</sub>	C <sub>2</sub>
中 卒	46	20	51	86
高 卒	11	4	1	16
中卒訓練生	22.7	9.8	25.1	42.4
高卒訓練生	34.4	12.5	3.1	50.0

第20表 訓練初期(1年次4月~10月) <B調査>

中退事由 中高卒別	A	B	C <sub>1</sub>	C <sub>2</sub>
中 卒	18	14	20	22
高 卒	6	1	0	12
中卒訓練生	24.3	16.1	21.5	36.6
高卒訓練生	31.6	5.3	0	63.2



第21表 訓練中後期(1年10月~2年次10月) <A調査>

中退事由 中高卒別	A	B	C <sub>1</sub>	C <sub>2</sub>
中 卒	28	6	31	64
高 卒	5	3	1	4
中卒訓練生	21.7	4.7	22.5	47.9 %
高卒訓練生	38.5	23.1	7.7	30.8

第23表 中卒訓練生と高卒訓練生との中退理由の比較

	中退事由	中卒	高卒	中卒	高卒	全体
A	適性・興味不一致	17	3	10.1	9.0	9.9
	病気・死亡・事故	17	4	10.1	12.1	10.3
	交友不適應	2	0	1.2	0	1.0
	進学不能	2	0	1.2	0	1.0
	進学	8	4	4.8	12.1	5.9
B	家業従事	3	4	1.8	12.1	3.4
	経済的困窮	10	0	6.0	0	4.9
	父親病気	3	0	1.8	0	1.5
	転宅	4	0	2.4	0	2.0
C <sub>1</sub>	勸告退校	25	1	14.9	3.0	12.6
	欠席数多く 訓練意欲なし	26	0	15.5	0	12.6
C <sub>2</sub>	その他	1	1	0.6	3.0	1.0
	一身上の都合 家事都合	52	16	31.0	48.5	33.9

## 第8節 ま と め

1) 訓練初期(1年次4月から10月)の中退率は昭和45年度-7.5%,昭和47年度-7.1%で年次的な中退率に大きな変動はない。

2) 2ヶ年間の訓練課程における中退率は約16%である。

3) 中卒訓練生の中退率が極くわずかではあるが高卒訓練生の中退率より高い。

ただし、訓練初期には高卒訓練生の中退率(10.9%)であり、中卒訓練生の中退率(8.7%)より若干高い。

4) 訓練校別の中退率はかなりの相異がある。昭和45年度訓練初期についてみれば、30.1%の中退率の総訓が最も高く、逆に中退者が全くいない総高訓もある。

5) 訓練職種別の中退率はかなり異なり、比較的中退率の高い科は自動車整備科、板金科、溶接科である。

逆に、中退率が低い科は木工科である。

6) 月別の中退者数をみると、2年間の課程で、入校直後の4月、1年次夏休み後の9月、1年修了時の3月に中退者の頻度が高くなっている。

また、中退者総数の約50%が1年次の9月頃までに、あとの25%が1年次修了までに、中退している傾向がみられる。

7) 中退時に提出される書類の<事由>欄の分析からは中退内容がつかみにくく、中退者の約半数についての中退内容しかつかめない。

8) 中卒訓練生と高卒訓練生との中退理由を比較すると、若干の差異がみとめられる。

例えば、高卒訓練生は勧告退校がほとんどないこと、家庭環境による中退でも、家庭経済の貧困によるものではなく、家業に従事が多いなどの特長がみられる。